「21 世紀における移民の記憶の継承」

小説や追悼儀式を例に

三村　尚央（千葉工業大学）

移民船エンパイア・ウィンドラッシュ号と小説『スモール・アイランド』（2004）

本報告では「記憶の継承」において、いったい何が継承されているのか、という問題を考察するきっかけとして、非白人系英国人の記憶継承に着目し、イギリスの多文化主義化の象徴ともなっている 1948 年にジャマイカから多くの移民（長らく 492 名とされていたが実際には 1000 名以上）を乗せて渡英してきた移民船エンパイア・ウィンドラッシュ号と、それを題材とする。女性作家アンドレア・レヴィの『スモール・アイランド』（Andrea Levy, *Small Island*）およびそのドラマ版アダプテーションを取り上げた。

『スモール・アイランド』はその 1948 年を主要な時間軸とし、移民船に乗ってジャマイカからイングランドへと移住したホーテンスとギルバートの夫婦と、彼らを住まわせるロンドンの下宿のオーナーであるイギリス人女性クィーニーを主要な語り手として設定している。また、他にもクィーニーの夫で、人種差別的な傾向のあるバーナードも登場する。全 59 章はこの四人が交代して語り手となり、1948 年以前の時代も回想しながら語られる構造になっている。

作品中では、ホーテンスとギルバートがイングランドで遭遇する苦難が時にコミカルに、あるいはシリアスに描かれ、現在では PC 的に正しくない黒人を揶揄する言葉、（Wog, darkie, coon など）が用いられたり、仕事を探すギルバートに、職場のオーナーが「あんたがうっかり白人女性に話しかけたらどうするんだ」と懸念を示すなど、1948 年当時のイギリスで強固に存在していた人種差別をめぐる衝突も克明に描き出している。

経験していない祖国について語る

作者アンドレア・レヴィはイングランド生まれだが、父親はジャマイカで生まれ育った後に、実際にウィンドラッシュ号に乗ってイギリスにやってきて、その数カ月後に母親が合流したことをインタビューでも語っている（Baxter 121）。彼らがイギリスにやってくる経緯は、『スモール・アイランド』でギルバートとホーテンスがやってくる順序として繰り返されている。つまり、レヴィは両親の経験の記憶を創造的（creative）に再現しているということもできる。また、彼女の母親はイギリスに来た後に 40 歳になってから大学に入り直して教師になっており、この点も『スモール・アイランド』でのホーテンスの教職をめぐるエピソードを思い起こさせる。レヴィによるこうした試みは、記憶研究における「第二世代研究」（second generation study）とも重なるところがある。

「第二世代研究」はもともとは、第二次世界大戦中のナチスによるホロコーストの生存者とその子孫たちのあいだでの記憶の継承について考え出されたモデルだが、後には移民たちの子孫が実際には訪れたことのない故郷の文化や生活を「想像・創造的」（imaginative / creative）に再現する行為、つまり想起する行為を考察する際にも適用されるようになった。実際レヴィは、『スモール・アイランド』の後、2010 年の長篇『長い歌』（*The Long Song*）では 19 世紀のジャマイカにおけるイギリスによる奴隷制をテーマにして、自分のルーツへと遡っている。

このモデルでキーとなっているのは、過去の記憶とは事実そのままの形ではなく、ある視点にもとづいて補正されながら整えられたものであるという見解が前提とされている点である。「記憶は政治的なもの」(memories are political)という記述は、そのような変性の可能性も含んだものであることがよく伝わるものである。そして、記憶の政治学においては集合的過去（collective past）が共有され、その編み直しにもとづいて、移民たちとそれを受け入れる社会とのあいだでの現在の関係が形成されると考えた。

第二世代問題についてのニナ・フィッシャー（Nina Fischer）の議論は、このプロセスにおいて記憶がはたす役割を「記憶の作用」（memory work）と呼び、単なる歴史的事実を記した記述との違いとして「つながりの感覚」（sense of connectedness）を必要とすることを強調する(Fischer 5)。

見落とされてきた記憶を想起する

またこの頃、2000 年代には旧植民地からイギリス軍に従軍した兵士たちについての関心も高まっており、2008 年には帝国戦争博物館（Imperial War Museum London）で"From War to Windrush"と題された展示が企画された。ここではジャマイカからの志願兵たちについて、彼らの経験した差別についても記述などのパーソナル

なアプローチも含めた展示が行われた(Korte and Pirker 227)。

だがそのような小説作品の特徴に対し、BBCのドラマ版ではギルバートが英国空軍で従軍していたことや、バーナードがインドに出征していたことなど、戦争も含めた 1948 年以前の過去にまつわる多くの事柄がそぎ落とされて、1948 年での差別と苦難が語りの中心となっている。そして小説版での複数の人物の一人称視点による語りから、単一の非人称的なボイスオーバーの語りの導入によって、語りの多様性が失われて、叙述が平板なものになってしまったということもできるだろう(Korte and Pirker 214)。

そして視聴者や批評家の多くを戸惑わせた原作にはない演出として、物語の終わりに場面が 2009 年に移って、ホーテンスとギルバートの子孫（原作で生まれた子の孫）と思われる人物が登場する。引用 21 にあるように、その家族は多民族的で、一番小さな子供には白人の友人がいるという、多文化的な共同体で生活していることが示唆される。こうした場面も含めて、作者レヴィはドラマ版について、「全然別物なので驚いた」ともインタビューで発言しているし、このような温和な演出は、1948 年以後続いていた、それまでの苦難を見えづらくしてしまうのではないかという批判もあった。なお、2019 年にナショナル・シアターによって演出された舞台版では原作に従って、クィーニーが肌の黒い自分の赤ん坊をホーテンスとギルバートに託す場面で終わっている。

ウィンドラッシュ号を想起し続ける

だがここでは、このような演出が喚起する、記憶の継承の可能性についても考察したい。それはいうなれば、円満なものだけでなく、辛いものも含めて、世代を超えて記憶を共有してゆく可能性である。その具体例の一つが資料にもあげている、地域のボランティアによって作成された関係者の証言集である。

これはバーミンガムを中心に活動しているキングスウェイ・プロジェクト（Kingsway project）と呼ばれる団体が、ウィンドラッシュ号だけでなくこの時期にジャマイカからイギリスへ移住してきた人や、その子孫たち（第二世代から第四世代まで）の回想をまとめた小冊子である。ここに挙げているのは、両親がジャマイカからやってきたという、教会の司祭と、1960 年代に飛行機に乗ってジャマイカから移住した女性のもので、この冊子の中では彼らも広い意味で「ウィンドラッシュ・ジェネレーション」とされている。

また本報告では祖先たちの経験を継承するもう一つの事例として、ウィンドラッシュ世代の子孫によって行われている記念行事の様子を紹介した。ウィンドラッシュ号が到着した 6 月に毎年、イングランド各地で行われているものの一つで、イングランド中部、バーミンガムにあるホーリー・トリニティ・チャーチで 2018 年に行われた。ここでは上述の小冊子にも登場する司祭による祈祷や説教、賛美歌の斉唱に交えて、教会に集まったウィンドラッシュ世代の子孫に当たる人々が、父母や祖父母の世代の苦難の経験について語っている。これは広い意味での口承形式のオーラル・ヒストリーといえるだろう。それらがシリアスなものとしてだけでなく、ユーモアも交えられながら語られていたのは非常に印象的である。この行事でもう一つ注目すべき点は、ここにレヴィの『スモール・アイランド』からの朗読が組み込まれている点である。実際には時間の関係で読まれることはなかったのだが、司祭からよい本だからぜひ読んでほしいと推薦されていたこともやはり印象的だった。報告内では報告者の撮影した式典の様子も紹介した。

こうした移民の記憶を継承する行事が、かつては人種差別的として悪名高い「血の川スピーチ」が行われたバーミンガムで行われていることは非常に象徴的である。だがこのような草の根的な活動の一方で、大きな政治的枠組の中では、強制送還などの処置も行われていたことも忘れてはならないだろう。それは自分たちの現在が達成されるためにくぐり抜けられてきた、過酷な歴史的プロセスにも思いを馳せ続けること。この式典の中では“invisible”という言葉が繰り返されていたのは印象的であった。見えないもの、あるいは見えなくされていたものを見えるようにすること。これからの文学研究にはこうした記憶の想起の作用がますます求められてゆくように思われる。

引用文献

Baxter, Jannette and David James. editors. Andrea Levy. Bloomsbury, 2014.

Fischer, Nina. Memory Work: The Second Generation, Palgrave Macmillan, 2015.

Korte, Barbara and Eva Ulrike Piker. Black History – White History: Britain’s Historical Program between Windrush and Wilberforce. Transcript Verlag, 2011.

Levy, Andrea. *Small Island*. Picador, 2004.